

パターン認識及び演習 (第3回)

2010. 4. 27

情報科学研究科
石井 健一郎

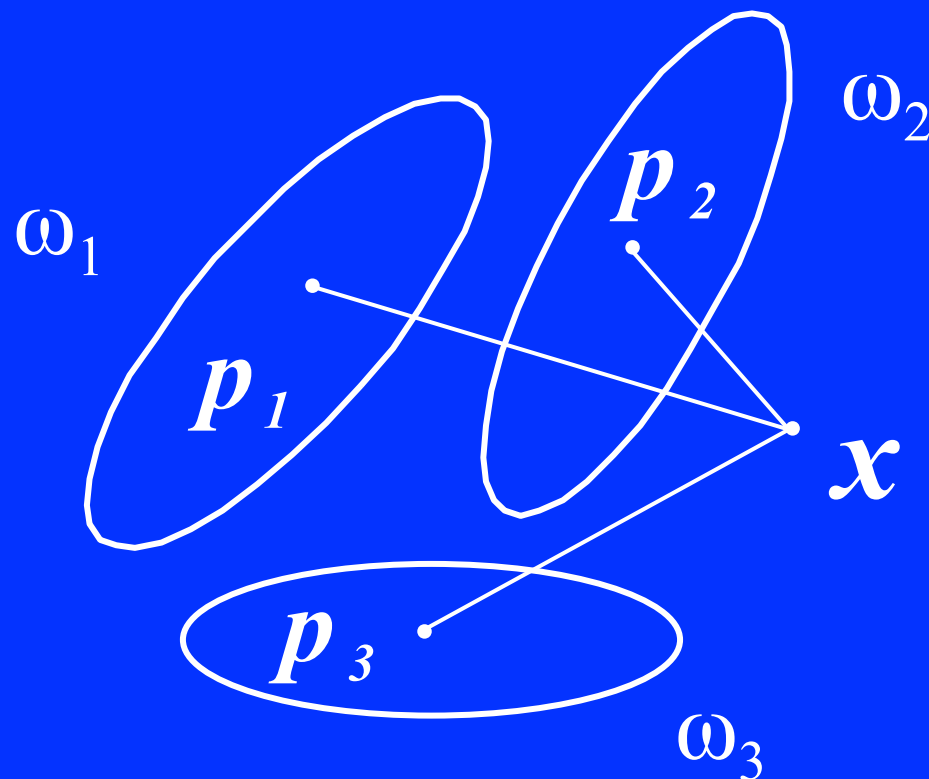
最小距離識別法 (1) 教科書14p下註

= クラスあたり1個のプロトタイプ

= Nearest Neighbor Rule の特別な場合

x : 入力パターン

p_1 p_2 p_3 : プロトタイプ



最小距離識別法 (2)

教科書14p 式(2.1)参照

$$\left\{ \begin{array}{l} \| \mathbf{x} - \mathbf{p}_1 \|^2 = \cancel{\| \mathbf{x} \|^2} - 2 \mathbf{p}_1^t \mathbf{x} + \| \mathbf{p}_1 \|^2 \\ \| \mathbf{x} - \mathbf{p}_2 \|^2 = \cancel{\| \mathbf{x} \|^2} - 2 \mathbf{p}_2^t \mathbf{x} + \| \mathbf{p}_2 \|^2 \\ \| \mathbf{x} - \mathbf{p}_3 \|^2 = \cancel{\| \mathbf{x} \|^2} - 2 \mathbf{p}_3^t \mathbf{x} + \| \mathbf{p}_3 \|^2 \end{array} \right.$$

内積

➔ 最小となる i ($i = 1, 2, 3$)

最小距離識別法 (3)

教科書15p 式(2.2)参照

識別関数

$$\left\{ \begin{array}{l} g_1(\mathbf{x}) = \mathbf{p}_1^t \mathbf{x} - \frac{1}{2} \|\mathbf{p}_1\|^2 \\ g_2(\mathbf{x}) = \mathbf{p}_2^t \mathbf{x} - \frac{1}{2} \|\mathbf{p}_2\|^2 \\ g_3(\mathbf{x}) = \mathbf{p}_3^t \mathbf{x} - \frac{1}{2} \|\mathbf{p}_3\|^2 \end{array} \right.$$

➔ 最大となる i ($i = 1, 2, 3$)

線形識別関数 ← クラスあたり1個の プロトタイプのNN法 (教科書17p下)

$$g_i(\mathbf{x})$$

$$= \mathbf{p}_i^t \mathbf{x} - \frac{1}{2} \|\mathbf{p}_i\|^2$$

$$= w_{i0} + w_{i1}x_1 + w_{i2}x_2 + \dots + w_{id}x_d$$

図2.2 識別関数法による識別

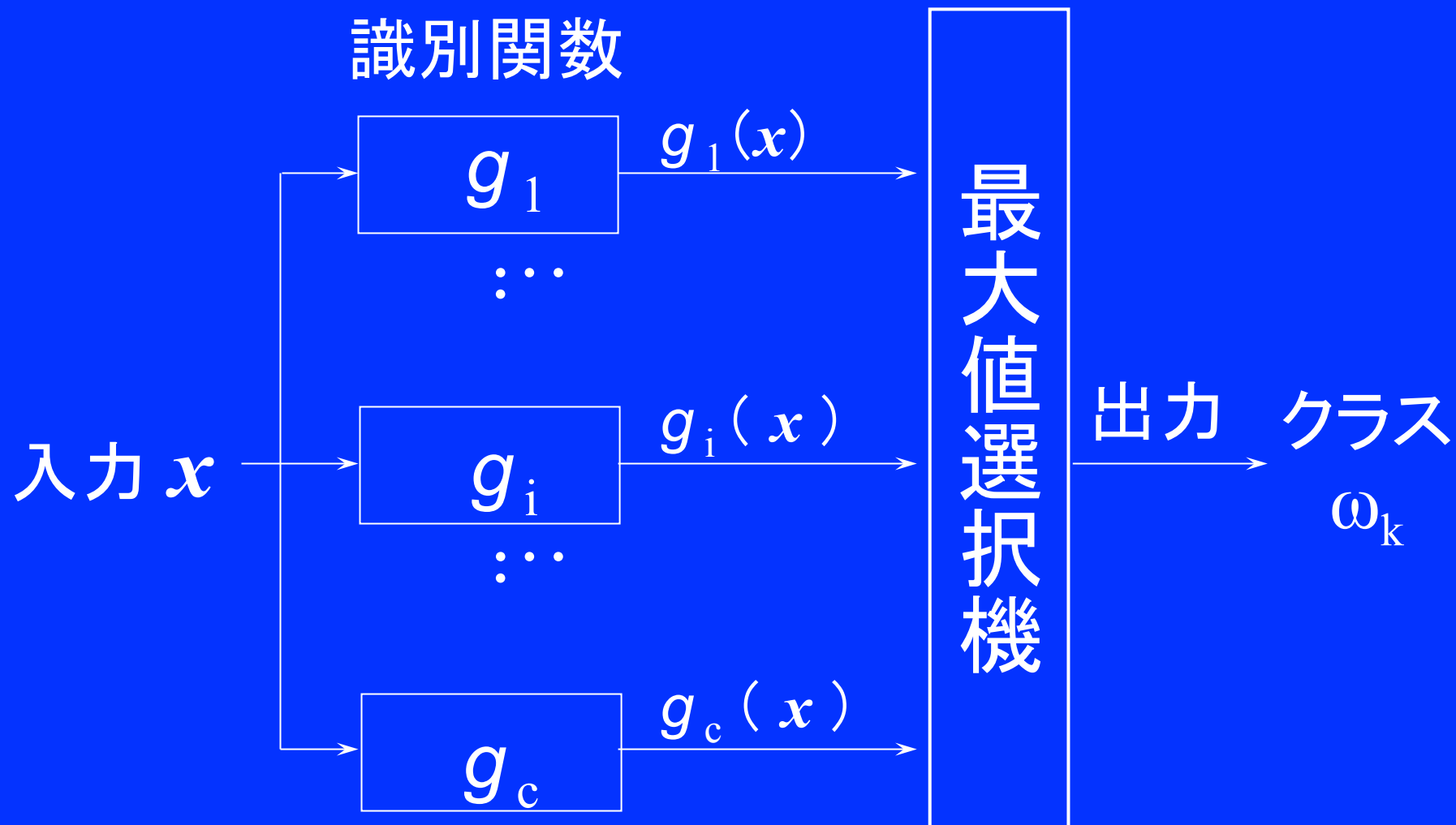
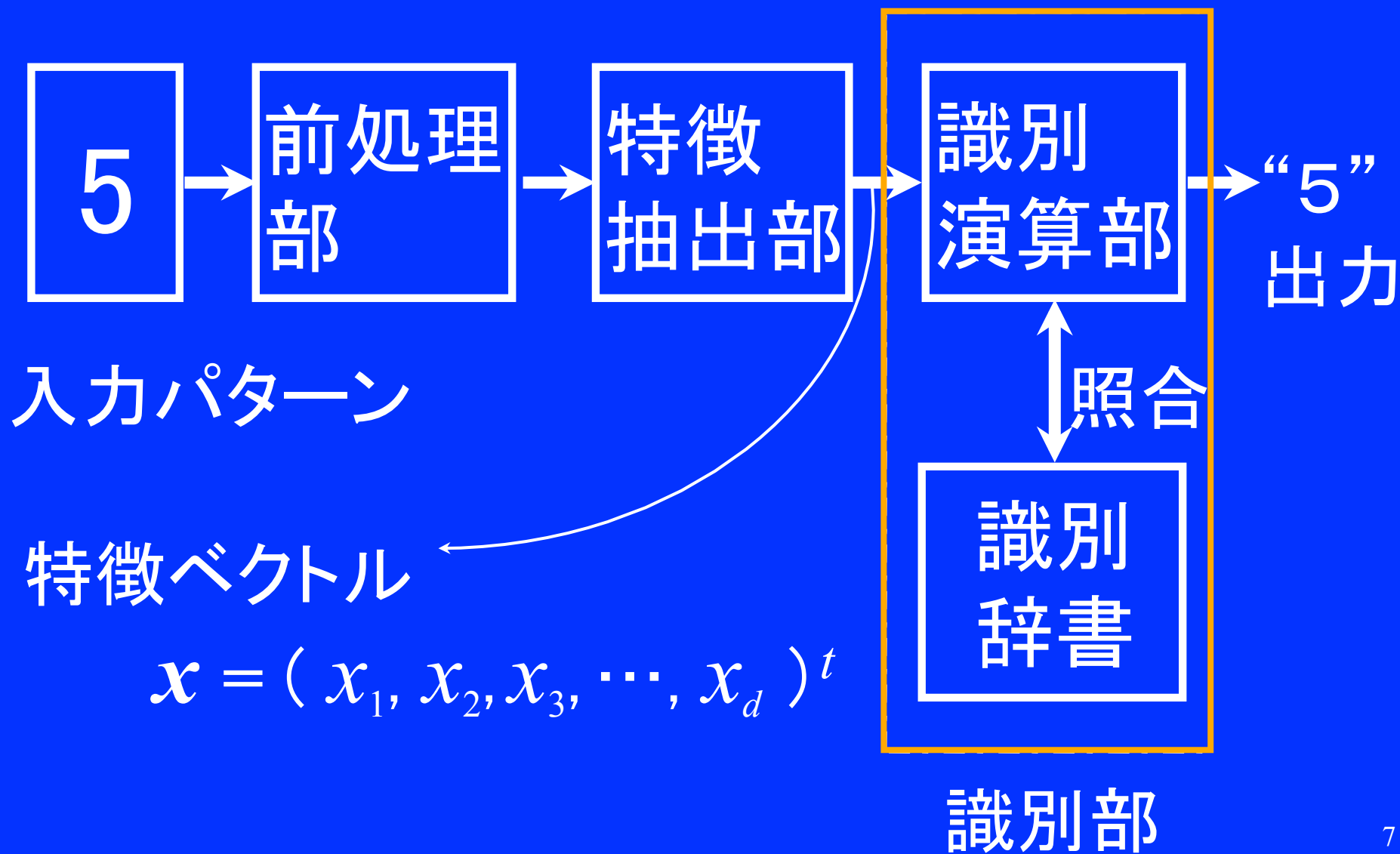


図1.1パターン認識系の構成



学習

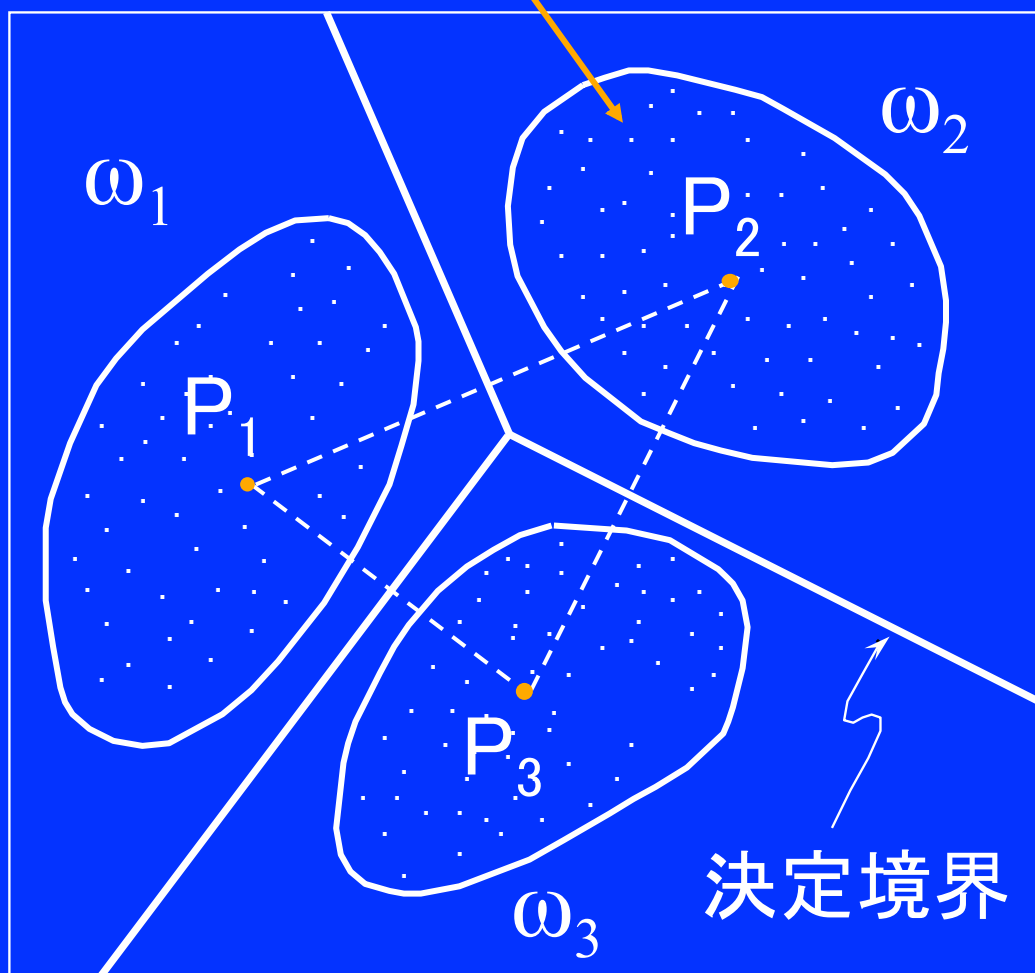
大量の学習パターンを収集

学習パターンを全て識別できるような
プロトタイプを求める(1個/クラス)

学習パターンを全て識別できるような
線形識別関数の重みを求める

図1.8 クラスあたり1個のプロトタイプ による特徴空間の分離

学習パターン

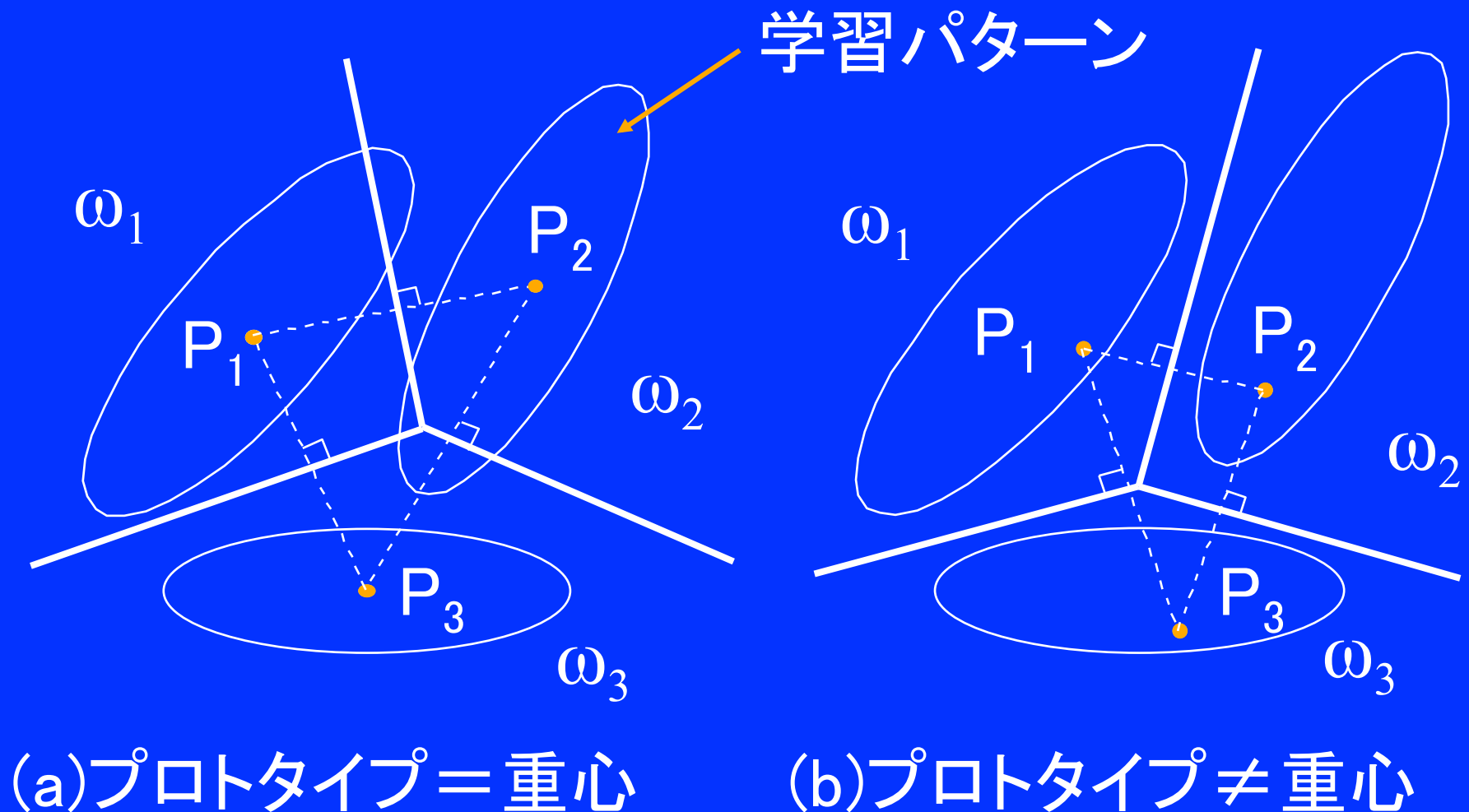


プロトタイプ



クラス分布の重心

図2.1 プロトタイプの設定方法とクラス間分離の関係



多次元空間上で
正しい決定境界を

自動的に求めたい

プロトタイプの正しい位置

(プロトタイプを移動
させると重みも変化する)



学習アルゴリズム

パーセプトロン

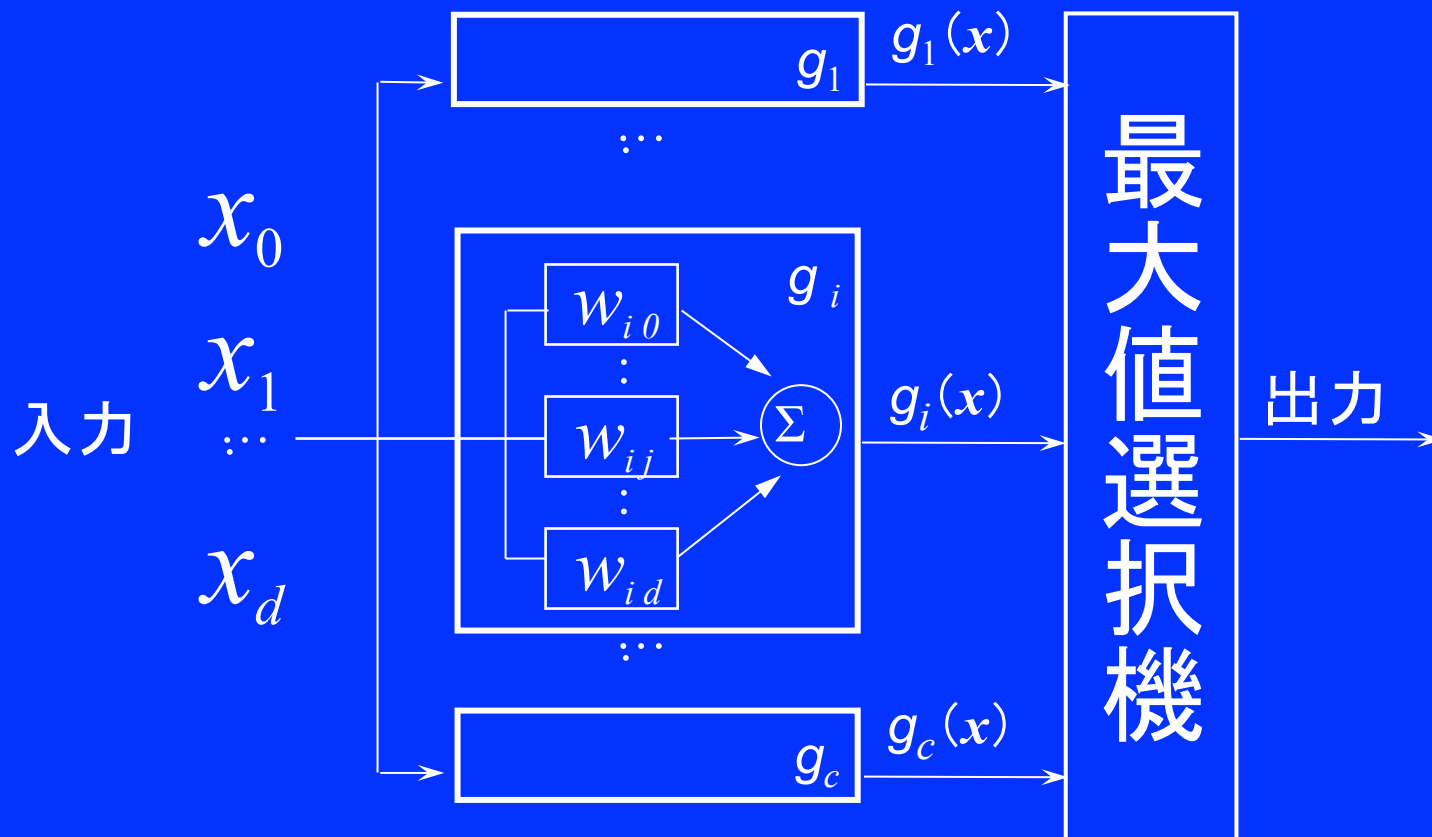
学習機能を持つ脳のモデルとして、F. Rosenblattによって1962年に提案された。

図2.3 線形識別関数

$$g_i(\mathbf{x}) = w_{i0} + w_{i1}x_1 + w_{i2}x_2 + \cdots + w_{id}x_d$$
$$= \mathbf{W}_i^t \mathbf{X}$$

パーセプトロン

識別関数



パーセプトロンの学習規則

(クラス数 $c > 2$ の場合 教科書23p 式(2.27))

- (1) 重みベクトル $w_i (i = 1, \dots, c)$ を初期設定
- (2) 学習パターン x を一つ選ぶ ($x \in \omega_i$ とする)
- (3) 誤識別した場合のみ重みベクトルを修正

$$\begin{cases} w_i' = w_i + \rho x \\ w_j' = w_j - \rho x \end{cases} \quad (x \in \omega_j \text{ と誤識別したとき})$$

- (4) 上記(2), (3)を全パターンに対して繰り返す
- (5) 全パターンを正しく識別できたら終了
誤りがある時は(2)に戻る

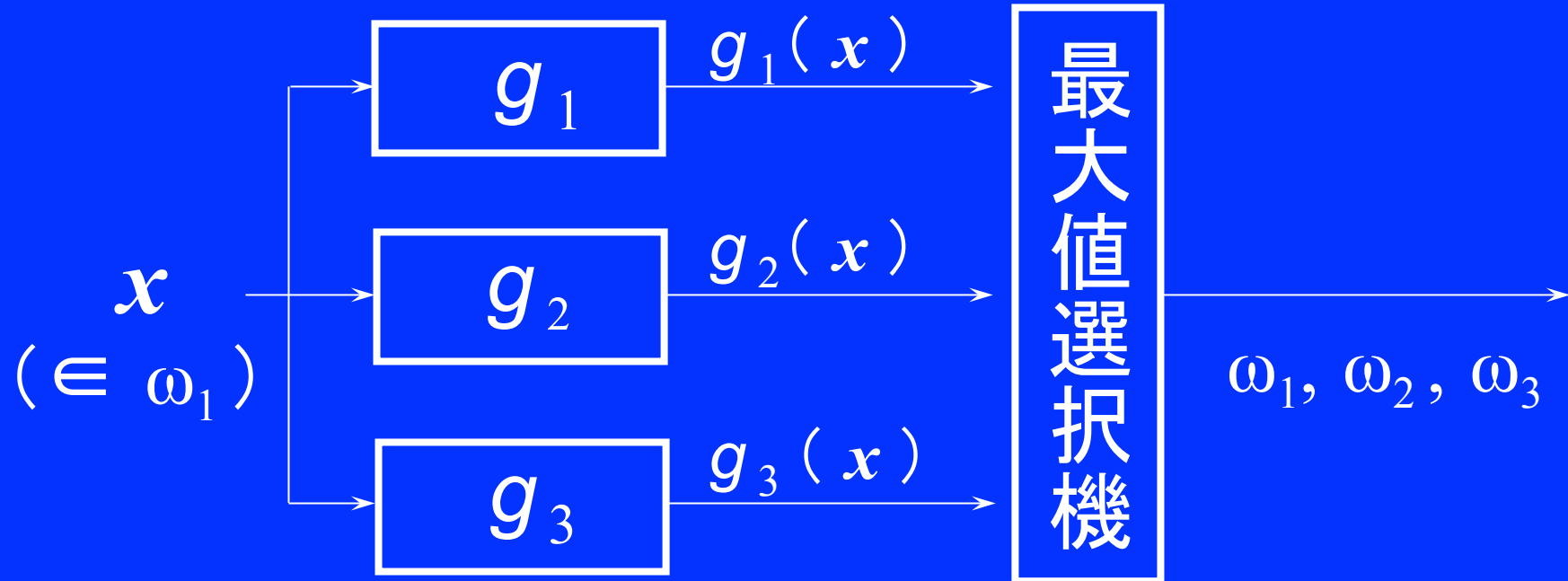
多クラスの場合のパーセプトロン (教科書23p 式(2-27))

ω_i のパターンを ω_j と誤ったとき
($\max_k \{ g_k(\mathbf{x}) \} = g_j(\mathbf{x})$)

重みの修正は2箇所で

- ・自分のクラス $\rightarrow g_i(\mathbf{x})$ の修正
- ・誤り先のクラス $\rightarrow g_j(\mathbf{x})$ の修正

多クラスの場合の誤り訂正法 ($C=3$ の例)



$$g_1 > g_2 > g_3$$

$$\textcircled{g_2} > \textcircled{g_1} > g_3$$

$$\textcircled{g_3} > \textcircled{g_1} > g_2$$

$$g_1 > g_3 > g_2$$

$$\textcircled{g_2} > g_3 > \textcircled{g_1}$$

$$\textcircled{g_3} > g_2 > \textcircled{g_1}$$

演習問題

学習による
重みベクトルの修正
(クラス数 = 3) ($\rho = 1$)

学習による重みベクトルの修正 (クラス数=3) ($\rho=1.0$)

繰り返し数	パターン番号	所属クラス	パターン			重み			g(x)	max	正○ 誤×	要修正	新しい重み		
			x_0	x_1	x_2	w_0	w_1	w_2					w_0'	w_1'	w_2'
1	1	ω_1	1	1	1	6	2	1	$g_1(x) = 9$	v	○				
						2	1	5	$g_2(x) = 8$						
						1	6	1	$g_3(x) = 8$						
2	2	ω_1	1	2	1	6	2	1	$g_1(x) = 11$		×	v	7	4	2
						2	1	5	$g_2(x) = 9$						
						1	6	1	$g_3(x) = 14$	v					
3	3	ω_2	1	1	3	7	4	2	$g_1(x) = 17$		○				
						2	1	5	$g_2(x) = 18$	v					
						0	4	0	$g_3(x) = 4$						

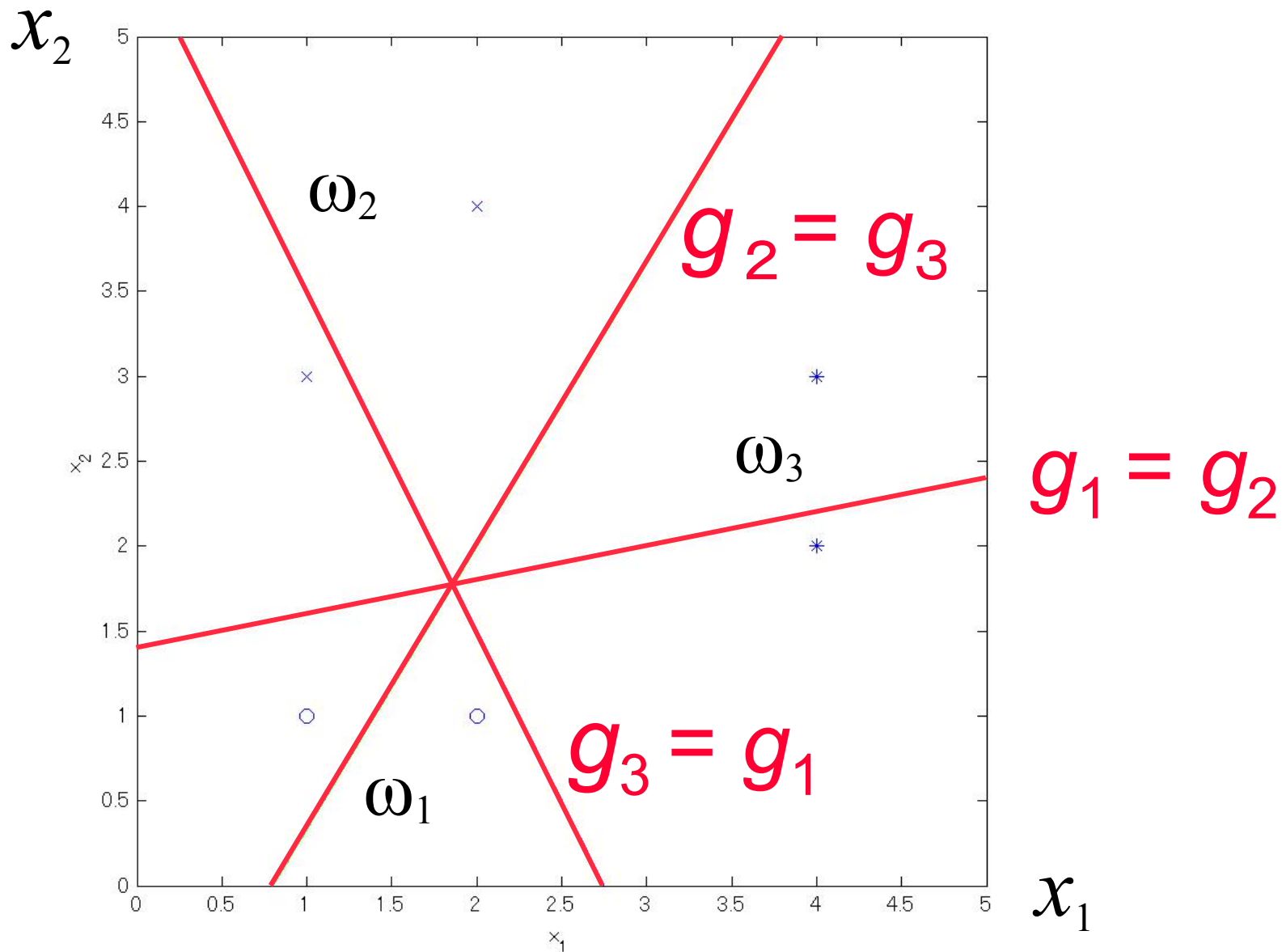
決定境界

$$g_1 - g_2 = 7 + x_1 - 5x_2 = 0$$

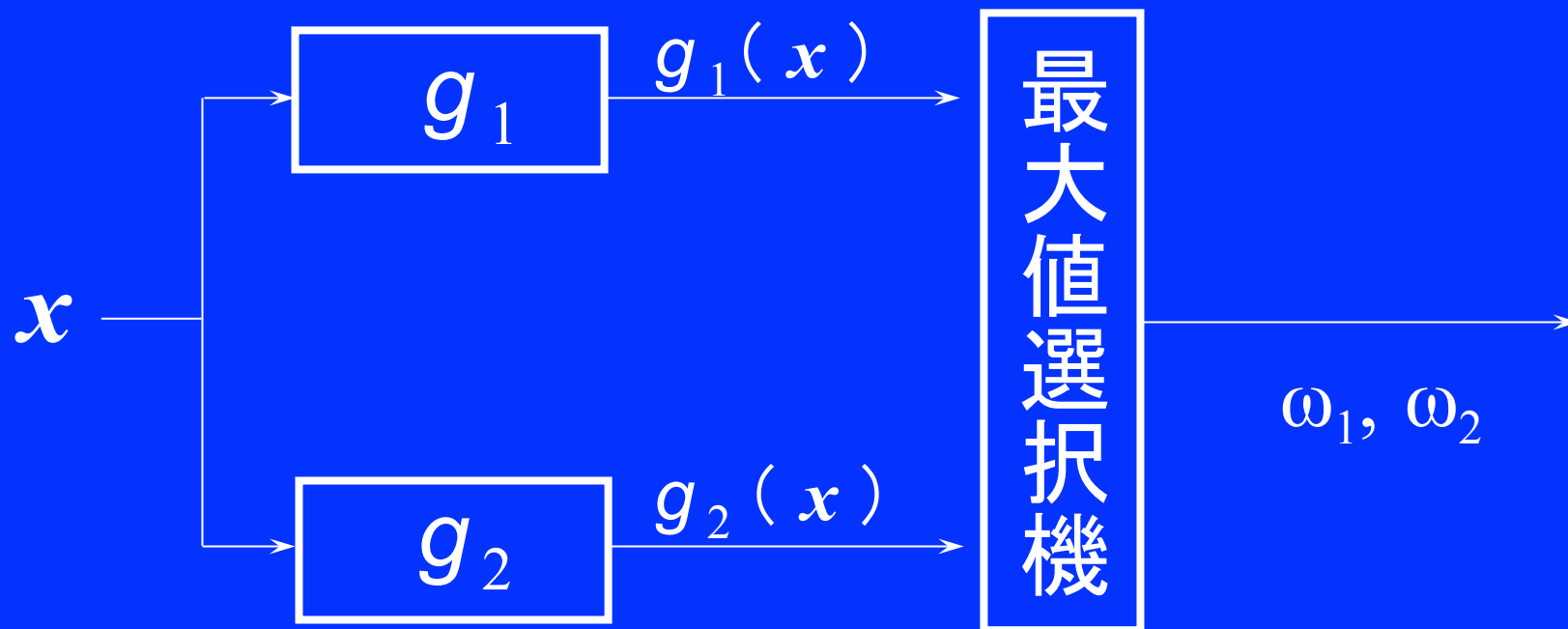
$$g_2 - g_3 = 4 - 5x_1 + 3x_2 = 0$$

$$g_3 - g_1 = -11 + 4x_1 + 2x_2 = 0$$

線形識別関数による決定境界 ([問4])



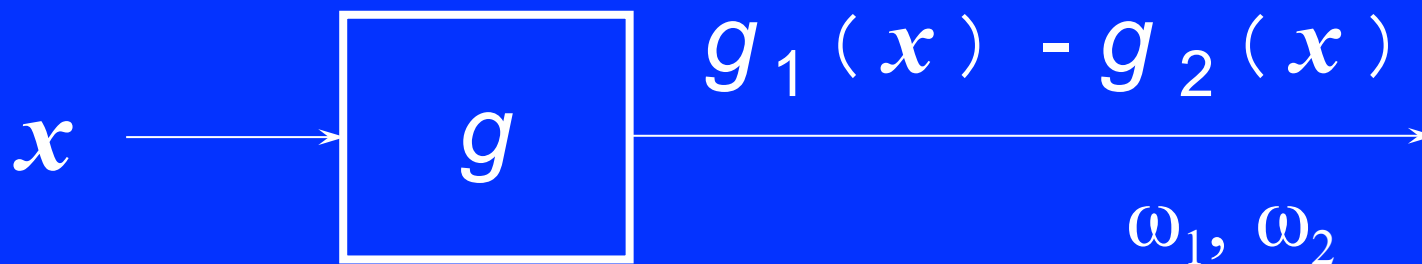
2クラスの場合の誤り訂正法



$$g_1 > g_2 \longrightarrow x \in \omega_1$$

$$g_2 > g_1 \longrightarrow x \in \omega_2$$

2クラスの場合の誤り訂正法 (1個の識別関数)



$$g = g_1 - g_2 > 0 \longrightarrow x \in \omega_1$$

$$g = g_1 - g_2 < 0 \longrightarrow x \in \omega_2$$

2クラスの場合のパーセプトロン

(教科書18p 式(2.18)~(2.21))

$$g(\mathbf{x}) = g_1(\mathbf{x}) - g_2(\mathbf{x})$$

$$= (\mathbf{w}_1 - \mathbf{w}_2)^t \mathbf{x}$$

$$= \mathbf{w}^t \mathbf{x}$$

$$\begin{cases} g(\mathbf{x}) = \mathbf{w}^t \mathbf{x} > 0 \rightarrow \mathbf{x} \in \omega_1 \\ g(\mathbf{x}) = \mathbf{w}^t \mathbf{x} < 0 \rightarrow \mathbf{x} \in \omega_2 \end{cases}$$

重みの修正は1箇所で

パーセプトロンの学習規則 (クラス数 $c=2$ の場合)

(教科書21p)

式(2.25)

式(2.26)



式(2.27)より導出できる

図2.4 学習の例

1次元特徴空間上の学習パターン
($d=1$)

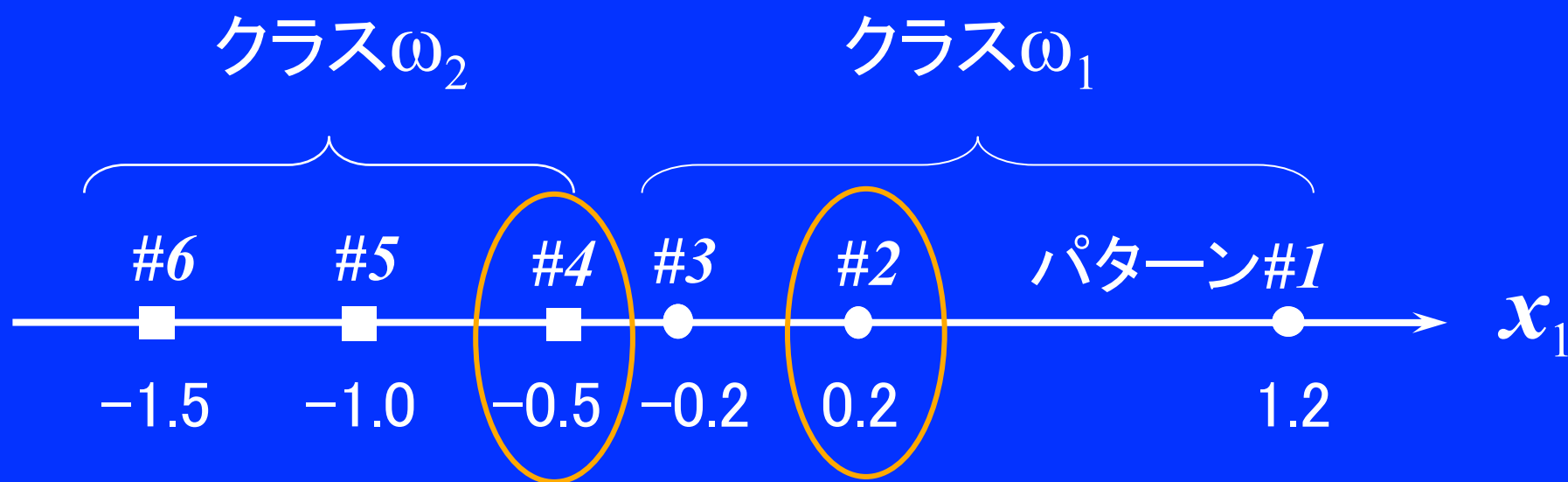


図2.5 重み空間と解領域

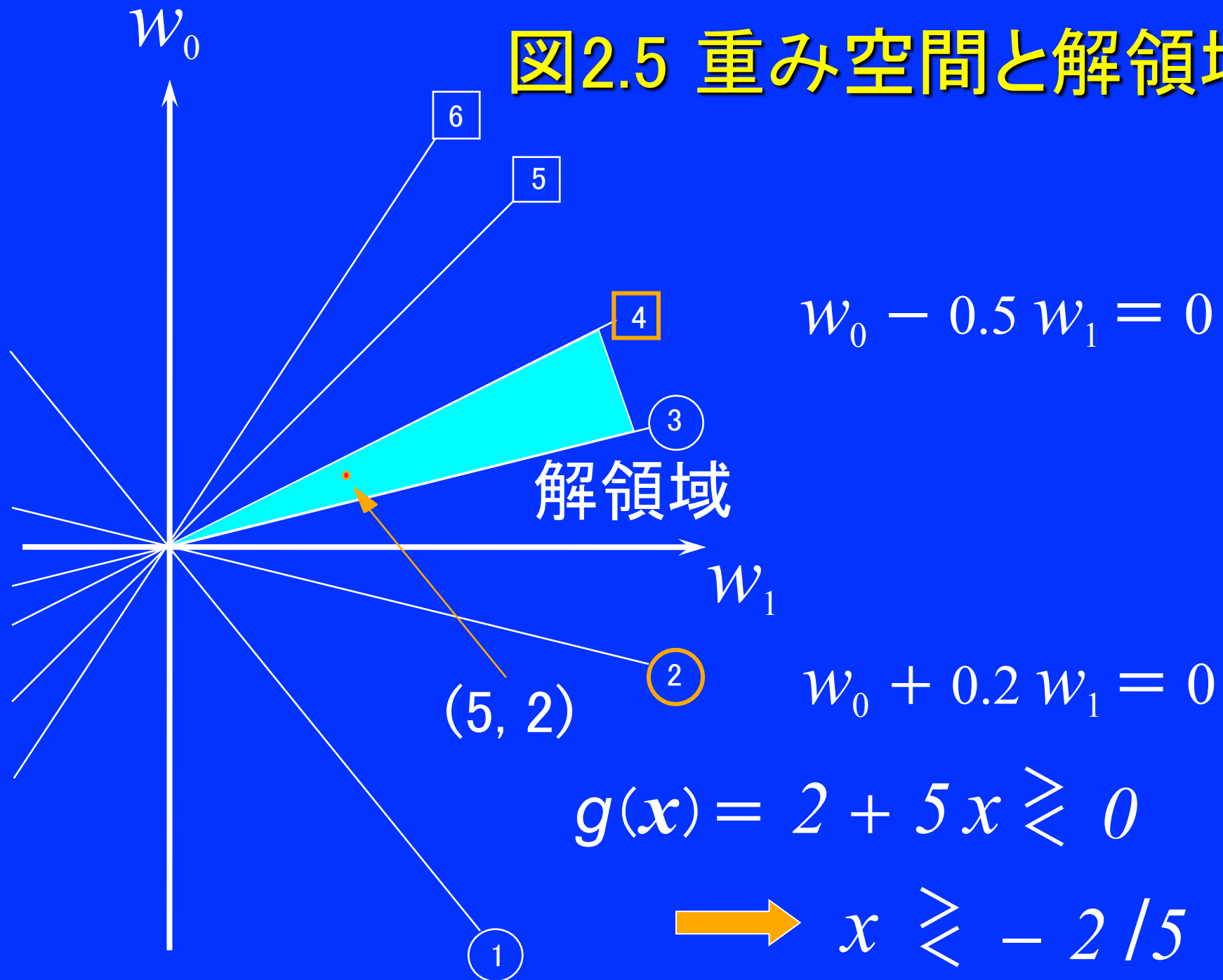
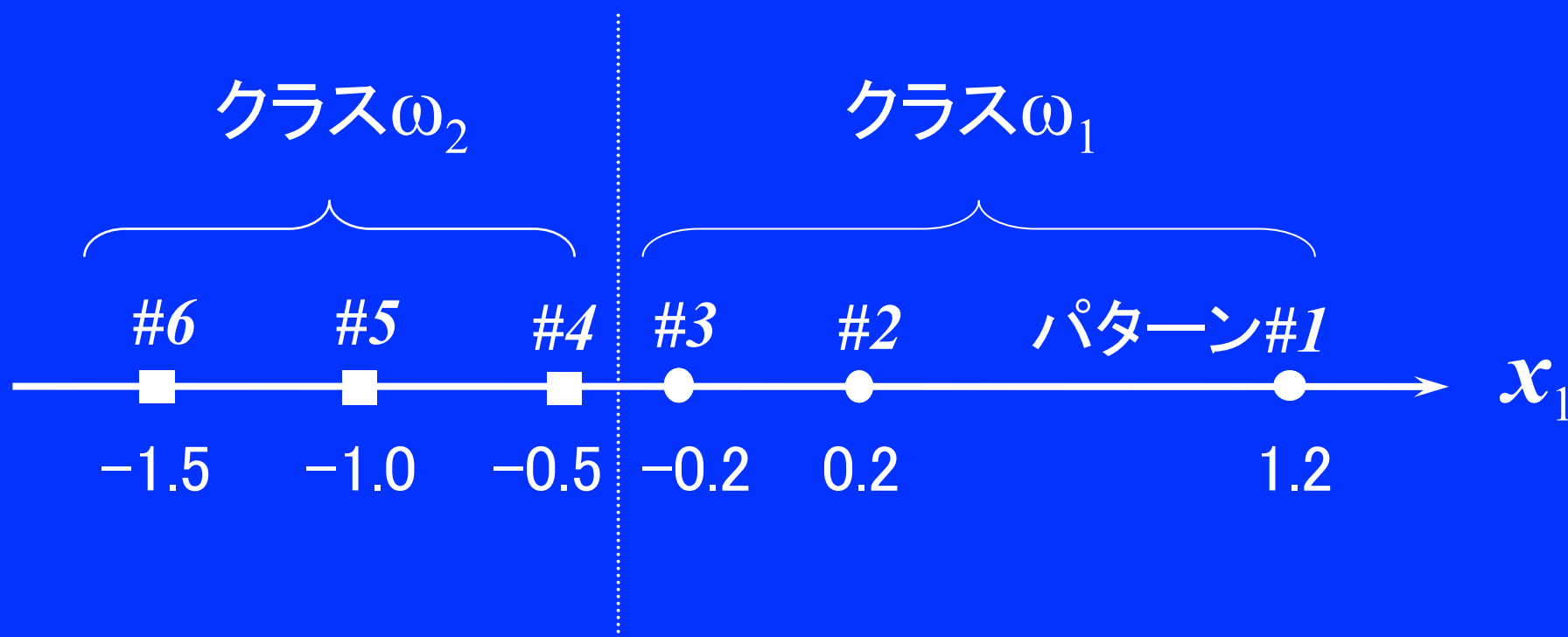


図2.4 学習の例

1次元特徴空間上の学習パターン
($d=1$)

$$x_1 = -\frac{2}{5} = -0.4$$



重み修正の幾何学的意味 (クラス数 $c=2$ の場合)

教科書22p 図2.6

図2.6 重みベクトルの修正

$$\mathbf{w}' = \mathbf{w} + \rho \mathbf{X}$$

$$\mathbf{w}' = \mathbf{w} - \rho \mathbf{X}$$

$$\mathbf{X}(x_1, x_0)^t$$

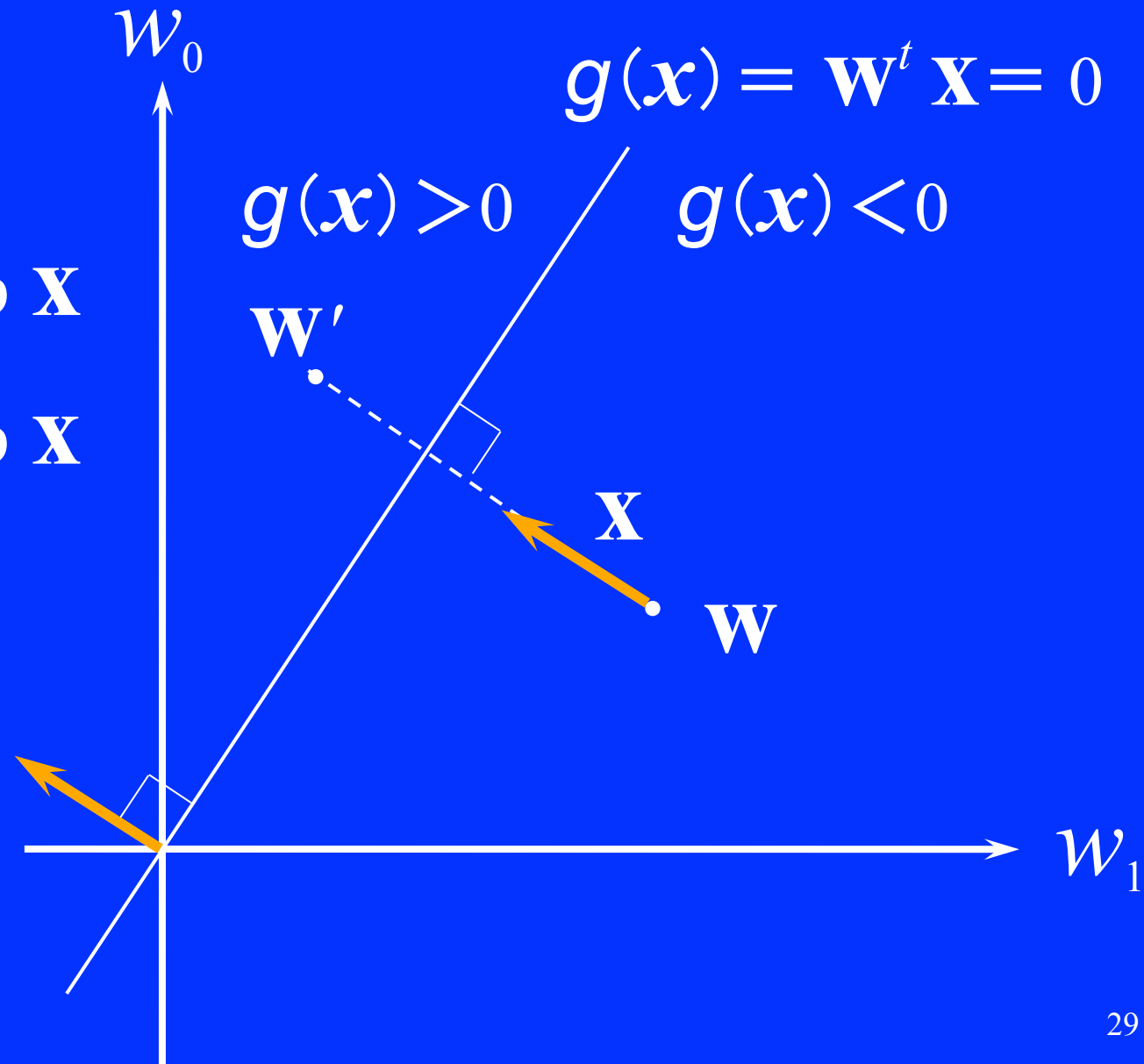
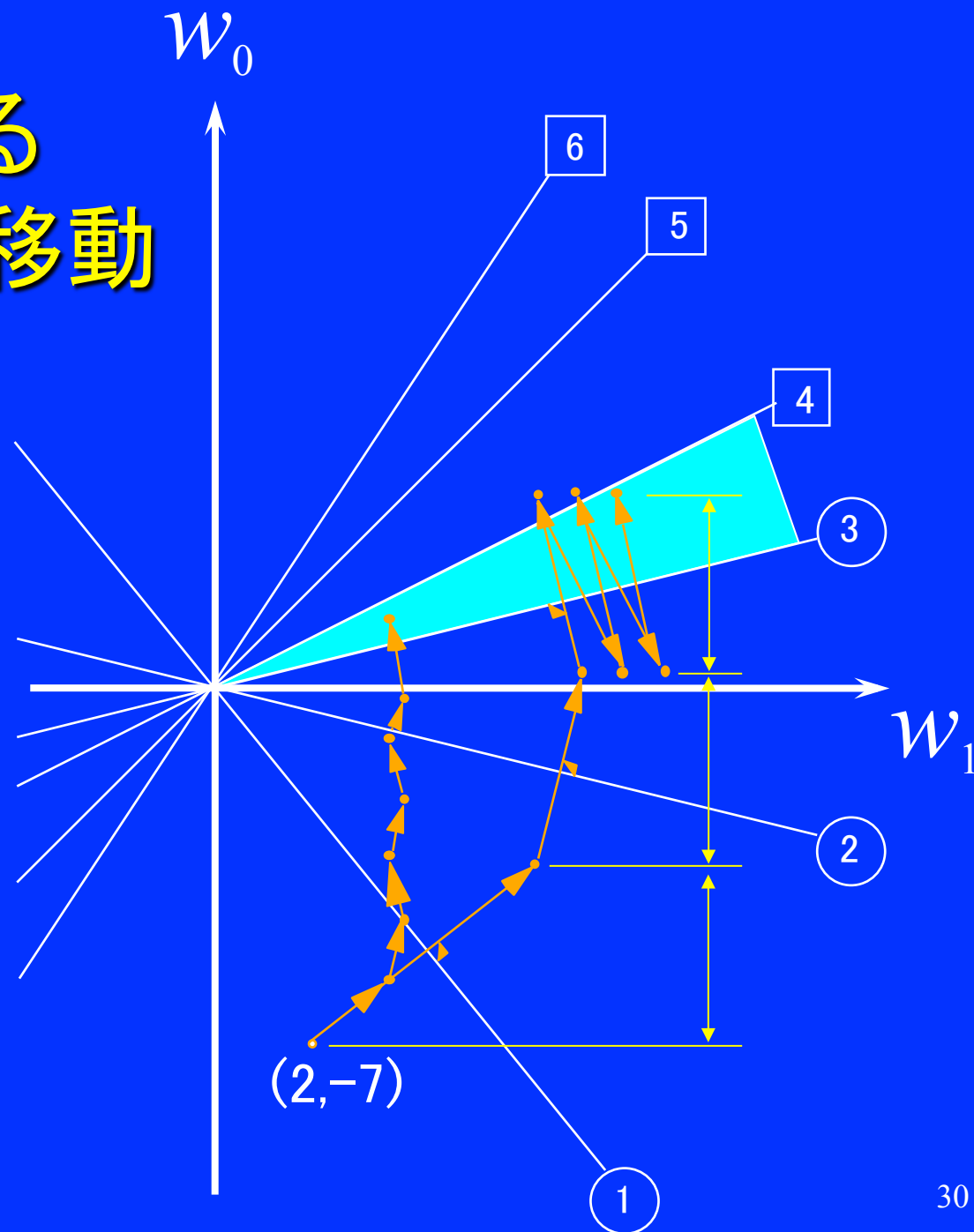


図2.7 学習による 重みベクトルの移動

$$\rho = 3.6$$

$$\rho = 1.2$$



パーセプトロンの収束定理

線形分離可能ならば、この手続きは有限回の繰り返しで全学習パターンを正しく識別する重みベクトルに収束する。

(教科書21p 下)

パーセプトロンの学習規則 (クラス数 $c=2$ の場合)

パーセプトロンの収束定理
(教科書21pの手順)